

素粒子物理学実験の現場から

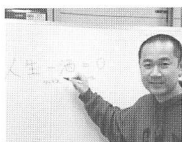
大阪大学 花垣 和則

私は出張での移動の最中あまり仕事をしません。したい衝動に駆られることもあるのですが、そこをジッと我慢。なるべくポーズとします。完全にポーズとしてることもあれば、脳の片隅で寝かせていたアイデアを練り直しているということもあります。というのも、大学での日常生活は研究者とはかけ離れたものですし、研究所で研究しているときでも、真にクリエイティブな時間を確保するというのは至難の業です。そんな生活の中で、出張の移動中というのはポーズとすることのできる貴重な時間だったりします。

実験を行っている最中、検出器の担当者であれば、何よりもまず担当の検出器をトラブルなしに稼働させることが最重要の任務です。あるいは、データ解析に必要なソフトウェアの開発担当者も同様のプレッシャーの中で作業を行っています。1人の仕事の遅れが数100人、あるいは1000人を超える人の作業を遅らせてしまうのですから、責任重大です。連日行われるミーティングで作業報告を行い、そこで得られた意見をもとに作業方針を決定し、その方針に従って深夜まで作業、そしてまたミーティング…これの繰り返しです。原理的には、作業方針の決定や改善案といったところに物理学者としての発想を盛り込んでいけるのですが、実際問題としては、本当に新しい発想が盛り込まれるのは稀で、過去の多くの経験が生かされる(だけ)というのが現状です。

収集したデータをもとに物理解析をするときも全く同じような状況です。過去の経験に基づいた解析を行い、同じ研究グループ内のライバルたちとミーティングで論戦を重ね…こういう日々では、ライバルに先を越されないようにと速度勝負となって、現存する手法よりも良い成果が出ると保証されていない新しいアイデアを試すのはかなりのギャンブルです。そもそも、ライバルの攻撃に備えて解析を進めていくので精一杯で、新しいアイデアを練る時間なんて作れないのが実情です。

というわけで、冒頭のように、移動時間というのが重要な思索時間というわけです。ノーベル賞で有名になった益川さんの入浴と似てるかもしれませんが…。ノーベル賞級の発想があるわけがないのが悲しいところですが…。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科・准教授

CERNでLHC実験に参加